



道路三態

吉田 一郎

畔 道

こどもの頃、私ははじめて郊外へ連れられて行つて、はるかに遠く打ちひろがり、ひろびろと展けた稲田を望んだ時、實に何ともいへないうれしい氣がしたものだ。この世の中に、こんな場所もあつたのか、といふ氣がした。

それは五六月頃でもあつたらう、植えつけられた稲苗がやつと泥土になじんでこれから根を張り伸びて行かうとし

てゐた。だからその縁は誠にあざやかだつた。撫でたら、のひらがくすぐつたからうと思はれるほど、柔かさうだつた。私は早く其處へ行つて、はねまはりたと思つた。手も足もうんと伸ばして寝そべつて見たいと思つた。座つて、このキラキラする美しい陽の光をたのしみたいと思つた。

稲田には、水があるといふことを、その時まで私は知らなかつたのだ。其處には蛭やみみずや異様な形をした甲蟲や環蟲類が棲んでゐることも、更に、あの快ささうに伸び

揃つてゐる青草は、自然に生えたものではなくて、人が一本でも疎漏のないやうに一箇所でも無駄のないやうにと、一生懸命綱を引張つて計算して碁盤目に植えつけて行つたものであることを。

その頃のこととも向きの夢のやうなお伽本の話に魅せられて、たとへば、赤いズボンを穿いたこびとに案内せられて、チューリップの花芯から飛び込んで行つたら思ひもかけず野原へ出たとか、アリババとか何とか呪文を唱へると、忽ち舞臺は一變して日は照り風はあたゝかといふのどかな春野になつてしまつたとか、そんな到底實現されさうにない空想に憧れてゐた私は、今目前にある風景こそまさしくそれだと思ひ込ますにはゐられなかつた。胸躍る、などといふ言葉はもちろんその頃知りはしなかつたが、今から思ひ遣ればそんな氣持で私は走り寄つて行つたものである。さうして私はすつかりがつかりしてしまつた。

苗と苗との間隔は四五寸もあるのに、何故に遠くから見ると爾く密生してゐる如くうつくしく見えるのであるか。

水は斯く、舟をでも通はせさうに湛えられてゐるのに、何故それが少しもわからないのであるか。

其處で小さな患者は、頭を振り振り考へたことである。いくら考へても解らなかつた。きほひこんで走つて來た餘勇で、思ひつきりすべりこみでもやつてやらうといふつものアテであつた。これから大きくなつてゆくにつれ、事毎に感ずるであらう幻滅の悲哀といふ奴を、小生意氣にくづく感じながら、私は未練さうに田甫を見まはしてゐた。

私が畔道といふものを見つけ、それが好きになつたのは其の時からである。幅は一尺あるかなし、大抵は直線ではあるがさうでないものもある。曲線のものもうねうねといふのではなく、所屬の田に沿うて美しい大弧を描く。片側の水際から水際まで、道全體が草におほはれて出來上つてゐる。おほはこ、たで、げんのしようこ、きんほうげ、みちしば、ぎしぎし、かやつりぐさ、ちどめぐさ、すみれ、たんほほ、げんげ、さみせんさう、など。これらの雑草は、皆それぞれに己が故郷なる畦道を飾るにふさはしいほどの

可憐なる花をつける。春が来れば春の、夏になれば夏の、秋といへば秋の、注意して見るならば冬にさへ、ひそやかにもつゝましい花をつけるのだ。黄、紫、紅、牡丹、淡紅、白。それらの色は人工の限りを盡して培養された庭園の大輪に持つ色だ。が同じ色でありながら、何といふ相違であらう。相違といへば、私はかつて知人なる或る富裕な家庭に育つた燥狂性の一婦人をあづかつたことがめる。その婦人はもと大變聰明な人だつたが、何か強い刺激を受けた事があつて、その爲に心勞して頭をこはしてしまひ、發作が起ると殆んど狂人のやうになつてしまふのだつた。そんな時、私は婦人の心を他に轉換させるために、つとめて戸外につれ出した。空を見せ、木々の緑を見せ、土を見せ、花壇に咲いてゐる花を見せる。

病人は花を見ることを特に好んだ。が私はそのあとで病人が一層興奮するらしいことに氣がついたので、次第に花壇につれて行くことを止めてしまつた。それから又氣がついた事には、發作後の沈鬱が甚だひどくなつて來たことで

あつた。私は醫者でないからわからないが、燥狂度と沈鬱度の差が大きくなることは好ましいことではないと思つた。私は考へて、それから連れて來たのが彼の畔道である。道幅がせまいので、いつも私が先に立つてゆつくりと歩いた。

「ゆつくりといらつしやい。下を向いて、足もとを見つめて、ゆつくりと。小さな花が咲いてゐますね。何でせう、ナヅナでせうか。」

私は時々後を向いて、靜かな聲で言ひかけるのであつた。病人は黙々としてついてくる。

「白い小さな花だ。おや今頃すみれが咲いてゐる。まるで使ひ残りの繪具をこぼしたやうに。」

「きんほうげの色はほがらかですね。私はあんな黄いろいお月様を見たことがありますよ。」

眞夏の朝露にぬれて點々水紅を落したやうなげんのしよこの花、さはやかな秋風にゆらぐ犬たでの花。私はいつの間にか病人のために畔道を歩いてやつてゐるのであるこ

とを忘れる程だつた。一わたり歩いてくると、仕事に疲れた私の頭脳もはつきりと澄んで来て、洗はれたやうに落ちつくのが感じられた。畔道を歩くのが殆んど日課のやうになつた頃には、病人はすっかり病人ではなくなつた。彼女は畔を横ぎつてながながとなめらかな脊を光らせてゐる蛇の軀體を、平氣でまたいで通るやうになつた。とかげの尾が千斷れたなり何時までもビクビクはねてゐるのを、氣絶でもしさうに氣味わるがつたのが、尾を置忘れたこの小動物の不格好さを面白がり、その虹色の脊の色彩に冷靜に見とれたりするやうになつたのを見て、私はもう大丈夫だと思つた。さうして病人は、いや病人ではない、すつかり冷靜な聰明な一人の婦人は東京の自邸に歸つて行つたのであるが、外に原因もあらう、或は快くなる時期が來て快くなつたのでもあらうけれども、私にはどうもあの畔道が利いたのだといふ氣がしてならないのである。

畔道の持つすなほさ、單順さ、靜けさ。即ちよさ。どちら向いても同じやうな青々とした稻のそよぎのさはやか

さ。

道をおほふ雜草の可憐さ、うつくしさ。私はそのかつての經驗から、疲れた時は必ず畔道を散歩することにしてゐた。

蛇やとかげの他、畔道に遊ぶものにへうきんな青蛙がゐる、黒や茶や、或はそのんだんだらの毛蟲がゐる、みみずがゐる、蝶や蛾がゐる、螢がゐる、蝗がゐる、得體の知れぬ名も知らぬいろんな虫がゐる。みんな憎めないものばかりだ。彼等はてんでにあるがまゝの生をたのしみ、享けただけの期間を生きやうとする。人間が勝手に好き嫌ひをつけるのは冒瀆である。

斯く觀じつゝ畔道を行く私は、途中でよく年老いた農夫が腰かけてゐるのに逢ふ。農夫は一服やつてゐる。お定まりの、吸殻を大きなてのひらの上にはたいて、次の一服をそれで吸ひつけてゐる。

「今日は。」

「はい今日は。」

私はその古ぼけた煙管から出る煙に、野性的な素撲な健

康さを生き生きと嗅ぐ。それから私も傍へしやがんで、今年の田の出来を、天候の關係を、畑作の鹽梅を訊く。農夫はゴツゴツと語る。私はゴツゴツと聽く。

或る時はまた、私は畔道のまんなかひにとりて立つてゐる古い大きな洋傘を見つけることがある。木綿張りの、黒い色が大分變化した傘は、どうかすると一本ばかり骨が突き出て、風の吹く日には七八十度に傾いてゐるのだ。傘の下にはきつと畚がをかけてゐて、中にはよく肥つた赤ん坊が入つてゐる。赤ん坊は眠つてゐることもあるし、起きてゐることもある。傘が日除けにならないで、赤ん坊の身體中、チカチカと強い陽光があたつてゐることもある。そんな時私は對照的に思ひ浮べるのだ。都會の大病院の一室で紫外線療法を受けるために鉛臭い太陽燈の光線を浴びて寢臺に横たはつてゐるやせこけた小兒を。

少しはなれて見てゐると、やがて母親が田甫から上つてくる。赤ん坊は畚の中からとり出されて母の胸に抱かれる。

母親は頼ずりする。赤ん坊はびつくりするやうな高い聲を擧げて笑ふ。その微笑ましい光景を私は何と言ひ現はしてよいかわからない。張り切つた乳房、それは日に焼けて赤茶色に染まつた健康色だ。乳はあふれるやうに出るのであらう、赤ん坊の頭はそれを飲み下すために活潑にゆれる。母親の手足は野良の土にまみれたまゝであるが、彼女は今勞働の疲勞も苦辛も覺えぬげである。ゆたかに、幸福に、古來東西の名匠はこれを名畫にした。正に名畫である。微笑ましい光景といへば、畔の團樂もあげなければならぬ。

「おうい、みんな。上つてこいよう。飯にするぞうい。」

一人が呼ばはると、鋤を鍬を肩や手にしながら集まつてくる。父も母も舅も小姑も子供たちも作男も皆一緒だ。太陽は頭のテツペンで照つてゐる。麥飯、芋の煮ころばし、大根漬、といつたものであるが、みんなよく食ふ。實によく食ふ。うまいのだ。何を食つても實にうまさうだ。胃病の者は胃病を忘れ、腸カタルの者は腸カタルを忘れ、肺病

は肺病を忘れ、脳病は腦の存在を忘れて、見てゐるとをほえず自分も一緒になつて食つて見たいやうな、生唾なまよばの衝動を覺える。

「茶が来たぞ。」

家の方から、赤い附紐のチヨコナンとした孫かなんかの手を引いて老母が、やかんを下げてくる。大きな茶碗に順々に注いで廻す。食後の一休みは殊にもたのしいものだ。

畔道はまた社交廊でもある。かたい紺緋りの着物に褌、手巾をつけ手拭をかぶつた、生地のままの發漉とした娘さん、短かいツボンに短かいシャツに、たくましい肉體をむき出したがん丈な青年、土に芽生え、土に培はれた戀は健康だ。かれらは白日の畔に行合うて微笑を交す。激しい農業労働をねぎらひ合ふ。一足先に歸るものに用事をたのみ。置き忘れた農具を持つて行つてやる。それでいゝのだ。

私はいかれらの戀を祝福して畔道を引返す。

鋪装道路

私は東京驛の前に立つて、呆氣にとられて、田舎者の標本のやうな格好で驚いた。眠つてゐる中に巨人の二本の指先につまみ上げられて、いきなりこの雑沓のまんなかに差置かれたかのやうに。私は先づキョロキョロして、目の前にひろがつた道路を見つめた。私がいし九州人だつたら、殆んど、アレンとして斯う言つただらう。

「ふてエがつてエ、ようもこげん何處どこから何處どこまで固め上げツしまうたもんたい。」

私がいし東北人だつたら、その次にはまた斯うひとりごつたに相違ない。

「はア、あんともア、青い草ツコの一本だつてはア、めつからねえだよ、ふんとに。」

それから私は、さう言つて我を忘れて驚歎してゐる私なんかにもくれず、ツウラ、ツウラと行き過ぎてしまふ自動車に、電車に、人々に、又深甚の感歎をおほえながら、やつと氣がついて足もとに目を落すのだ。足もとには赫色の無数の龜甲形がつながつてつゞいてゐる。立派なもんだ

なと思ふ。俺がの村長さの床間の壁とどつちがどつちかなと思つて見る。龜甲はなめらかであるが、決してすべりはしませんといふ顔をしてゐる。私は履物を脱ぎ十二文の足袋を脱いで素足で踏んで見る。ひやりとして氣持がいい。私の足の方がよつほどガサガサしてゐる。

この前私が東京へ来た時は震災後一二年してからだつた記念日には酒無デーとか白粉無デーとかいつて殊勝らしいデーをやるのが流行つた時分であつた。東京といふ所は恐ろしいところで、その頃地方にゐて酒も白粉も殆んど使はうたつて使へない人たちにまで、こつけいにもデーを強いた。地方人はマジメだから、几帳面にこの譯のわからないデーをやつてゐた。今東京人はどうだらう。」

それは餘談だが、その時私は復興局の道路課につとめる一人知人を訪ねた。知人は、同行の一女人の實兄にあたるのだが、私はたのまれて連れて行つてやつたのである。この兄妹は四五年ぶりの對面であつた。扉を排して現はれた知人は、妹の姿を見て、これは、といふ顔をした。それで私

も氣がついたのである。なるほどナ、東京の埃は大へんなものだ。

知人はリウとした服装（たうり）をしてゐた。白いカラ、きちんと結んだ襟飾、はでな流行柄の洋服、靴。忘れてならないことにこの兄はその時結婚前だつたのだ。實妹といへども、女性である限り、きやうだいとしてよりも女性として映るのは當然といはなければならぬ。何がこの兄に斯く幻滅を感じさせたか？ などとしかつべらしい言ひ方をしなくてもよろしい。

歩きまはつてやつとたづねあてゝ来た私たちが、どんなに埃だらけになつてゐたか。バラツクの東京、灰神樂の東京は實に汚かつた。如何に端麗な女性といへどもたとへば中央線から下車した時のやうに申分なくうす汚れてしまふのだ。そんな時、どうしたわけか男よりも女の方が餘計うすよごれて見える。うす汚れた女といふものは興のさめるものだ。おまけにもつといけないことに彼女は平氣で思つたまゝの實感を述べた。

「いくら震災後だつて、東京はずぬぶん汚いのねえ。」
東京人は、いや、もつと正確に言へば東京市に引きつゝ

き一年以上住みたる者は、例外なしにふしぎに東京を偏愛するやうになる。知人はすっかりその妹にいいそを盡かしてしまつた。知人はとうとう、妹が四五日後歸郷するといふのに瞬へ送つて行かなかつた。が人々よ兄の薄情をとがめてはならない。この場合兄妹であつて仕合だつた。私はその頃東京市の道路が幾何の婦人をして、思ひがけない不仕合な目にあはせたであらうかを思ふ。幾何の男子をして、百年の戀を一時に醒めさせたであらうかを思ふ。だから人々は、この私の知人に對しては、たゞかういふことだけ考へてよい。友愛を阻害したものは東京市の道路なのである。

もつと職務に勉勵して早く復興道路を完成することは、人倫の道徳を進める所以である。たとひ一日速く仕事を完成することは、失業を一日速からしめることであらうとも……。しかし私がこんなたゞどしい事をしやべつてゐる間

に、知人はさつさと結婚してしまつた。勿論それは東京ではなかつた。

私はやつと安全地帯へたどりついて、柄になく轉、往時を追懐しかけたが、そんな感慨はたちまち吹つ飛ばされてしまつた。數知れず押し寄せてくる自動車群は恰も大河の流れを見るやうである。澎湃、といつた感じさへある。先年私の住む村境の大川が氾濫して、見渡す限りの稻田の上を濁水の層が押し行つたことがある。水は數日間もつゝいた。恐ろしいゆるやかな速度で、厚みで、巾で、澎湃として下流へ押し向つた。それは寧ろ一舉に堤防を決して奔溢する刹那よりも、もつと強く目に見えぬ何かのちからを感じさせた。何か運命的な、抗し難いものが感じられた。

幾億の物象の摩擦から生ずる大都會の雑音の中に、無数の磨滅から生ずる塵埃の浮動の中に立ちつゝ、私の心にはさむぎむと食ひ入る何ものがあつた。砥の如きアスファルト鋪道に、點々滴り落ちる油のしみは、時を経た血のやうだ。警笛がけたたましい咆哮をあげる度に街路樹の葉が

その上に散る。街路樹には生色がない。

舗装！ 舗装！ 舗装！ 道路牆壁、ビルディング、電車、自動車、交通巡查も行人も、何と悉く舗装し武装してゐることよ。私は舗石の下に黒土の悲鳴をきく。土は生きてゐる、土はさうして萬物を育みたいのだ。草を木を花を菜つ葉を、大根を芋を。生きてゐる以上、正しく水を吸ひ陽を浴び、肥えてたくましく盛りあがつてゐたいにちがひない。しかしそれは永久に不可能なことだ。舗装に一寸した不完全な部分があつて、裂目でも出来たら土は陽の目を見る間もなく早速人夫がやつて来てふさいでしまふだらう私は街路樹の根もと方三四尺にわづかに見出だす憂鬱な土の素肌を心を惹かれる。其處には二十間巾三十間巾の舗装に幽閉された土のひろがりの、ふつふつと激ち立つ嗟嘆が、喘ぎが、吐息の如く立騰つてゐる。

見渡す物皆の中に装甲されないものは、街路樹の根もとの外にもう一つだけあつた。それは曉方の空である。曉方の空である。

澄明な朝空が次第に煤煙と塵埃と騒音とに舗装工事されてゆくと、おづおづと出て來た田舎びとの心はすべての装甲に壓伏されて萎縮してしまふ。しかし東京はせせら笑ひつゝ冷然といふ。萎縮するものは萎縮しちまへ、壓伏されるものは壓伏されろ、俺らは來るところまで來たんだ。必要は眞理だ。さあまだまだ行くところまで行くんだぞ。下手な感傷なんか引きくだいてコンクリートの砂ななかへ叩つ込んぢやへ——。

里 道

私の家の横を北から南へ巾一間の里道が通じてゐる。

その道は恰度私の家を中心に置いて一丁ばかりの間で完全なS字形をなして、又ずつと續いてゐるのだ。それほど完全なS字形ではなくても、この道は随分と至る所に大小の弧を描いて走つてゐることである。自然に出来上つた田舎道には、こんなのが甚だ多い。そもそも一番はじめに通つて行つた人は、一たいどういふ用事があつたのだらう、

私はS字形の中央にイんでよくそんな馬鹿げたことを考へる。

一番はじめの人もさることながら、次々とした人が皆やはりそのあとを踏襲して斯く曲りくねつて歩いたであらうことを思ふと、何か微笑したい氣持になる。

いつか、鐵砲玉のやうにオートバイが駛つて来て見ん事S字のはじまりで田甫へ落ち込んだ。私は乗物の中でオートバイが一番嫌ひだ。私の尊敬する人が、一たい自動車と自轉車があればあんなものは要りませんね、と言つたが、それ以來私は一層その人を尊敬したいと思つた程だ。自轉車の輕快がなく、自動車の寛濶がなく、電車の大衆性がなく、汽車の、まで持ち出すまでもなく、あのややこしい暑苦しいな兩輪の間を見るところにざりする。おまけに劉曉たる音をでも出すことか、鬼が雷に打たれたやうな聲を二丁も三丁も先から蹴立てゝくるのだ。坊主憎ければではないが、私はオートバイに乗つかつてゐる人の顔を見てやりたい。申合せたやうにみんな得々としてゐる顔を……。私が心ひ

そかにこんな悪たれ口をたゝいてゐると、其のへんに働いてゐた農人たちは親切だから、いつも頭から砂塵を捲き立てられるウラミも忘れて仕事を止めて引上げを手傳つてやつてゐる。引上つたところを見ると泥製のオートバイが出來上つてゐる。「なアに、構ひません構ひません。」と乗者は頻りに構はながつてゐる。やつとのことで一通り乗れるやうにしてもらつて、乗者はまたがつた。一二度ドタアンバタバタツといふ没趣味な音が聞え出したかと思つたらあつといふ間に今度は反對側の田甫へころげ落ちてしまつた。S字形の終りのところである。よくよくSの字に敬意を表したものと見える。親切な「皆の衆」もさすがに此の時ばかりははははと笑つたことである。このカーブではよくこんなことがある。

自動車が通ると、恰度道巾一ぱいになるので、通る人は片足だけ道から落して待つてゐる。「ありがたう。すみません」。運轉手は丁寧に會釋して通り過ぎる。

豪雨のあとには、どうかするとどじやうやふなが上つて

くることがある。抜目のない猫が出て来てそれを狙ふ。子供たちが見つけて猫を追拂ひ、靴の足跡を大きくしてどじやうを泳がせたり、文字通りの轍鮒を遡らせたりする。子供たちは池を造り海を作り山を築く。茶碗をつくり井をつくり動物をつくり人間をつくる。嬉々として遊ぶ。一立方糶の路面の土に何萬の黴菌がゐやうと、子供たちは發測として健康のやうだ。黴菌の傳染率は學者の机上でだけなのかも知れない。

水たまりが次第に少なくなつて、魚族も殆んど漁獲され盡した頃、午後の路上は暫く人影がとだえる。雨後の空に白雲が飛ぶ。どこからかとんぼがやつて来て漆面にすれすれに觸れて行く。潦の水は澄んで、刃物のやうに薄くなりながら、しかも動ぜぬみたかさにひろがつてゐる。何か影のやうなものがその上にたゆたふのを認めて、私は近づく。數匹の水すましであつた。蜘蛛の糸を針金でつくつたやうな長い足が、脛節のやうなしつかりした軀體を支へてゐる。この虫を見る時程、水の表面張力をはつきり感ずることは

ない。水といふものに強い憑依を感じさせられることはない。潦の深さは既に二三分に過ぎぬ。其の上を休んでは動きたのしげにあそぶ水すまし、底には東から西へ悠々と雲が流れてゆく。

私は道路にゐることを忘れて、仙人の如く冥想する。

